

学 習 8-4

連想により想起される反応語と保有されている知識との対応

藤木 卓 , 金崎 良一 , 糸山 景大
 (長崎大学教育学部) (長崎市立横尾中学校) (長崎大学教育学部)

1. はじめに

単一自由連想法により想起される反応語には、刺激語から受ける被験者のイメージが表出するものと考えられる。そのため、この方法は、得られた結果に情報論的な処理を加えてイメージのマップを作図することで、授業により獲得する知識や概念の評価手法に利用可能である。

しかし、連想における反応語と知識との対応に関する研究は遅れており、イメージマップの解釈に限界を生じさせている。そこで、自由連想により単一の刺激語から想起される反応語と保有されている知識との対応関係を調べるために、連想調査と、関連する語句を知っている程度や興味の程度に関する調査を行った。

2. 研究の方法

大学生52名を対象として、「情報処理」を刺激語とする単一自由連想調査を行った。そして、その直後に、「情報処理」に関連する71語句について、どの程度知っているか(認識度)、またどの程度興味があるか(興味度)を、被験者自身の価値尺度に基づいて4段階で判定してもらった。単一自由連想法は、刺激語から直接想起される語を筆記させる方法であり、連想時間は30秒とした。反応語を出やすくするために、事前に、単一自由連想調査について説明を加え、適当な具体例で練習を行った。

3. 結果及び考察

連想調査により得られた反応語の内、反応者数が2名以上であった反応語とその反応者数、並びに、認識度と興味度調査の中に存在した語句について、その得点平均を表1に示す。なお、表中の反応語は、反応者数が最大のものから降順に整理されている。

表から分かるように、連想調査における反応語の上位5個のすべてについて、興味度平均が高く、認識度平均も2.3以上である。特に、連想調査で多数が挙げた反応語は、被験者集団が高い興味

表1 連想による反応語と興味度、認識度

反 応 語 (反応者数2以上)	反応者数 (52人中)	興味度平均 4 <---> 1	認識度平均 4 <---> 1
*コンピュータ	31	3.75	2.69
*パソコン	22	3.65	3.02
*フロッピーディスク	17	3.12	3.04
*インターネット	16	3.69	2.31
*ワープロ	9	3.52	3.10
数字	7		
難しい	6		
*電子メール	5	3.21	2.31
*キーボード	3	2.98	3.21
データ	3		
演習	3		
会社	3		
機械	3		
計算	3		
商業	3		
藤木	3		
*BIT	2	2.67	2.04
*WWW	2	2.21	1.33
アルファベット	2		
キー	2		
*ネットワーク	2	3.27	2.40
*マルチメディア	2	3.35	2.58
計算機	2		
文字	2		

*印は連想調査及び認識度、興味度調査の両方に出現する語

を示す語句である。知らない語句が反応語として出現することは考えられない。したがって、知っていることが前提となり、興味の高いもので、しかも刺激語から連想しやすいものが出現したと考えられる。ただし、興味度や認識度が高い語句の全てが、連想による上位の反応語として出てくる訳ではない。

4. まとめ

連想による反応語と語句の興味度や認識度に関する対応関係を調べるために、単一自由連想法による連想調査と、自らの価値基準に基づく4段階による興味度、認識度の調査を行った。その結果、連想反応で上位の語句は、被験者の興味の度合いが高くしかもよく知っている語句であることが分かった。